
食人館《しょくじんかん》

カワニシ美玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
食人館

【NNコード】

N4636Z

【作者名】

カワニシ美玲

【あらすじ】

大学生活最後の思い出にと、真下秋宏は恋人の涼花を含む五人で山にピクニックに出かけた。しかし山に向かう途中の森林で道に迷つてしまい、やつとの思いで森林を抜け出すとそこには古びた館がある。

好奇心に誘われ館の中に入つた六人を待つていたのは、人肉を喰らう化け物だった。

プロローグ（前書き）

これは一部ホラー や残酷な要素が含まれていますので、そういうた
類の苦手な方は観賞をお控えください。

プロローグ

『ここに迷い込んでからもう何年の年月が過ぎ去ったのだろう。疲労や食糧不足で身体は限界のようだ。誰か助けてください。またあいつが来る。

あいつにまた見つかったら、僕は今度こそ死を覚悟しなければなりません。

だからお願ひです。誰でもいいんです、早く助けてください。僕をここから出し——』

これは、とある廃墟はいきょになつた館から発見された置き手紙。手紙の内容はここで途切れてい、続きを発見することはついに出来なかつたといつ。

ただ唯一、この置き手紙の最後の一文と思しき切れ端だけは発見できている。しかし所々に染みのようなものが付着し、その一文から解読できた言葉は以下の通りである。

『——さ——なら——涼花——てる。——秋宏』

絶望の予兆

晴天。今日の空模様を一言で表すのなら、それが一番合っているだろひ。

海よりもさらに広大に見える青空。雲も景気よくあちこちを浮遊している。

そんな何気ない日常にさえ、今日の真下秋宏は目がいつてしまう。なんといっても今日は、僕の大学生活最後の一日なのだ。それを祝福するかのような天候についていつい目がいつてしまふのも、必然といえば必然である。

それに、今日の僕はある人に大事なことを伝えなければいけない。受け入れてくれるか、多少の不安はあるものの言つてみなければ結果は誰にも分からぬ。

要するに、当たつて砕けろといったところだ。

「秋ちゃん！」

と、不意に後ろから声をかけられた。同時に締まりなく開いていた口元が、きゅっと引き締まる。そして後ろに振り向くと一人の女性が立っていた。名前は神戸涼花、この大学を受験した時に知り合った彼女は今では友達ではなく、恋人として僕と付き合っている。

艶のあるサラサラとした長い黒髪に、小顔でどこかおつとりした顔立ち。身長は百七十センチと、女性にしては背が高くモデルのような綺麗なプロポーションを保っている。

そんな彼女が、地味でこれといった長所もない僕なんかと付き合つているというのは、些かな疑問でもある。

「秋ちゃんどうしたの？ 話があるって何？」

涼花が穏やかな優しい声で僕に問い合わせてくる。

「いや、ええと……。その、ね」

緊張からか、少々口ごもってしまう。それでも秋宏は意を決して少しづつ、少しづつ話し始めた。

「今日でさ、大学生活も終わりだね」

「そうだね。……友達とも会う機会が少なくなるし、寂しくなつ
ちゃうね」

涼花はそう言いながら、心底^{しんざい}殘念^{ざんねん}そうな顔を僕に向けてくる。

「うん……。それで、さあ……僕達も大学終わつたら会える機会が
少なくなるかもしれないじゃん?」

「うーん、確かに……。私、秋ちゃんとなかなか会えなくなるのは
嫌だな」

「それで、なんだけどさあ……」

秋宏はそこで一旦話すのをやめ、目を閉じる。そして頭に疑問符を浮かべ次の言葉を待つ涼花に、緊張した面持ちでこう告げた。

「……僕達、結婚しないか?」

「…………え?」

予想していた通りの、長々とした沈黙。しばらくの間、お互^{よつよ}いの言動が強制的に一時停止される。

そして、先に沈黙を破ったのは涼花の方だった。

「…………うん」

消え入りそうな声だったが、涼花は確かにそう言った。ということはつまり……、

「…………オッケー?」

涼花は一度同じことは言わず、ただ黙つて微笑んだ。途端に秋宏の両足から力が抜け、秋宏は地面に膝から崩れ落ちる。

「あ、ちょっと秋ちゃん!/? 大丈夫?」

地面に倒れた僕に、涼花が心配そうに駆け寄る。

「大丈夫、返事聞いて安心したら腰が抜けちゃって」

そうはにかみながら答える。すると涼花は、

「もう、…………秋ちゃんの馬鹿」

そう言ってから静かに微笑み、僕の頬に優しくキスをした。

「お、いたいた。真下ー」

するとそんな一人のいい雰囲気などお構いなしに、遠方から自分を呼ぶ慣れ親しんだ声が耳に届く。

「あ～つ悪い、取り込み中だつたか？」

そう言いながら僕ら一人に話しかけてきたのは、一人の大柄な男だった。

身長、百八十センチ。角刈りにされた髪型に加え目付きが悪く、傍は目から見たらヤクザに誤解され兼ねないこの男の名は松村大輝といい、涼花と同じく大学で知り合つた僕の男友達の一人である。

「大丈夫だよ。で、何？」

両足が機能してきたので、地面から立ち上がりながら横目で松村に返答を促す。

「ああ、そうそう。ほら今日で大学も終わりだろ？だから最後にみんなで集まつて、思い出作なんいかなかつて……どう？」

「思い出作りか……。涼花、どうする？」

涼花に言葉を伝達すると、涼花は普段通りの穏やかな声で、「いいんじやないかな？みんなで思い出作ろうよ…」と答えたので僕も思い出作りに参加することに決めた。

松村が言うにはもう案は決まっていて、僕らの大学からちょうど東に見える山にピクニックに行くことだった。尚、山に着くまでの移動手段は車で、松村の親友であり僕の友達でもある柴村浩太が来て運転することになっている。

その他にも、涼花の友達である白川真奈美さんや佐々川香苗さん。さらには佐々川さんの双子の兄で、僕の友達の佐々川直人も来てくれるらしい。

みんな大学生活最後とあって、派手に遊んでやるうといふ気持ちでいっぱいらしい。

「あいよ。じゃあ、一時間後にここに集合してればいいんだな？」

松村から受け取つた伝言を、再確認のためもう一度聞く。松村は「ああ」とだけ言って頷き、不都合があつたら電話してくれと言つてその場を去つていった。

すると、今まで僕の隣で黙つて話を聞いていた涼花が口を開いた。

「ふふ、楽しみだねー。みんなで大学の最後の思い出いっぽい作ろうね、秋ちゃん」

と笑顔で僕に言う。僕はその満面の笑みを浮かべる涼花に、

「うん、そうだね。」

と言い、ピクニックの準備のため「じゃあ一時間後にね」と僕らも

その場を離れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4636z/>

食人館《しょくじんかん》

2011年12月16日20時54分発行